

特集 宮城県図書館のルーツを訪ねて その4



本館南側の遊歩道
「書見の道」内の東屋
(作/川俣正)



●宮城ゆかりの作家を、作品の一節とともに紹介します

岡本 綺堂 「仙台五色筆」より

「孔雀船の舟唄」

塩竈から松島へむかう東京の人々は、鳳凰丸と孔雀丸とに乗せられた。われわれの一行は孔雀丸に乗った。

伝え聞く、伊達政宗は松島の風景を愛賞して、船遊びのために二艘の御座船を造らせた。鳳凰丸と孔雀丸とが即ちそれである。風流の仙台太守は更に二十余章の舟唄を作らせた。そのうちには自作もあると云う。爾来、代々の藩侯も同じ雛型に因って同じ船を作らせ、同じ海に浮かんで同じ舟唄を歌わせた。

われわれが今度乗せられた新しい二艘の船も、むかしの雛型に寸分たがわずに造らせたものだそう、ただ出来を急いだ為に船べりに黒漆を施すの暇がなかったと云う。船には七人の老人が羽織袴で行儀よく坐っていた。わたしも初めはこの人々を何者とも知らなかった、また別に何の注意をも払わなかった。

船が松の青い島々をめぐって行くうちに、同船の森知事が起つて、かの老人たちを紹介した。今日この孔雀丸を浮かべるに就いて、旧藩時代の御座船の船頭を探し求めたが、その多数は既に死に絶えて、僅かに生き残っているのは此の数人に過ぎない。どうか此の人々の口から政宗公以来伝わって来た舟唄の一節を聴いて貰いたいとのことであった。